

所属	国際交流研究科 国際交流専攻 修士課程	修了年度	平成 26 年度
氏名	李 田萌	指導教員 (主査)	有元 修一

論文題目	鎌倉時代の甲冑に関する一考察
------	----------------

本文概要

I 研究目的

甲冑は防具でありながら時代の産物でもある。時代とともに変化し、その時代の歴史を反映している。甲冑の種類は様々あるが、鎌倉時代の代表的な鎧は「大鎧」と「腹巻」である。「大鎧」から「腹巻」への変化に関して、現在の研究では実戦面の原因ばかりに注目し、鎧における変化と当時の歴史の動きとの関連の角度から考察するものが少ないような印象を受ける。

本論文では、大鎧と腹巻の構造と当時の歴史を分析しながら、腹巻とその背景にある歴史とはどのように連動していたのかを考察する。

II 論文の構成

第一章 日本甲冑の歴史と「大鎧」「腹巻」の構造

第二章 従来の実戦面からの視点

第三章 遣唐使の廃止と「大鎧」の出現

第四章 「腹巻」と蒙古襲来

III 内容と結論

大鎧と腹巻の構造を見ると当時の戦闘方式に向いていることは明らかである。大鎧の構造は平安時代に行われた騎馬戦に合っているし、腹巻も南北朝、室町時代に多発した集団戦や接近徒歩戦に合っている。しかしこれはすべて実戦面の問題で、当時の歴史的背景からみると、遣唐使廃止と蒙古襲来という歴史事象が、大鎧と腹巻の誕生に関係があると考えられる。

大鎧が登場した本当の原因は、実戦のためだけではなく、894年に菅原道真の提案で遣唐使が廃止されたことと関係しているのではないかと考える。遣唐使が廃止されるまでは、唐風文化が日本の社会全体に浸透していた。しかし、8世紀末の中国は戦乱が続き、中国文化の影響力が弱まったため、遂に遣唐使は廃止された。遣唐使の廃止によって日本は、中国の直接的影響から脱出し、従来の「唐風文化」から「国風文化」へと発展していく。「国風文化」の中で、日本風のものが出現し、鎧も職人たちによって独自に開発されるようになった。結果として日本風の大鎧が作られたのではないと思われる。

腹巻も同じように、蒙古襲来と深い関係があると私は考える。1274年の文永の役と1281年の弘安の役において、日本は従来の戦闘法（騎射戦）で蒙古軍と戦った。しかし、蒙古軍による集団戦に、1対1の騎射戦に慣れていた日本軍は苦戦した。必死に戦って天気にも恵まれて結果的に勝利したが、当時の幕府軍もこの二回の交戦で従来の戦闘法と装備がもう時代遅れだと認識したはずである。歴史の流れを見ても、それから山城戦、山岳戦による奇襲、待ち伏せなどの戦闘法を使うようになって徒歩武者の集団が増えていったのである。さらに弘安の役後、幕府は蒙古との戦いで財政などにおいてかなりのダメージを受けて、さらに一番重要な恩賞地を確保することができないので、戦争に手柄を立てた武士にすべてを補償することができなかった。一部貧窮になった武士は、もはや高価な大鎧を持つことができなくなる。そうすると幕府の信用が落ち、武士たちの不満を募らせる結果となり、地方に対する制御力も弱まる一方だった。騎馬戦の時代が終わり、徒歩戦の時代が来る。鎧も時代とともに変化し、それで腹巻は大鎧を越え主流になったのではないと思われる。